／船場･淀屋･鴻池　／熟塾･淀屋研究会共催企画

≪落語”と“街歩き”で巡る船場･豪商夢の跡≫

2011年10月9日(日) 午後1時半～6時

大阪美術倶楽部(旧鴻池本宅跡) 3階備前の間

船場まつりに参加し、今年は淀屋研究会と共催で、江戸時代の船場の豪商旧鴻池本宅跡、船場の粋を今に伝える大阪美術倶楽部･備前の間を舞台に落語会を開催しました。

午後１時半、主催者を熟塾を代表して原田が挨拶し、淀屋研究会の毛利代表が、備前の間を飾っている日本画家・菅楯彦の筆による緞帳の中にある生駒山をバックに大阪城を中心に淀屋橋・栴檀の木橋・天満橋・京橋を描いた江戸時代の大坂の街について紹介。

幕が開くと、流石古美術商が運営する大阪倶楽部！１千万円を下らないという風格ある老松を中心に左右に梅と竹の屏風が舞台一杯に飾られ、そこに、笑福亭竹林が登場。落語と船場について紹介。

続いては、林家染雀がほとんど高座では演じられることがない演題「雁風呂」を熱演。旅姿の武士が遠州・掛川の街道筋の料理屋で昼食をとった。ふと目に留まった「松と雁」の屏風。「なぜ、松に鶴ではなく、雁なのか」と後に入ってきた町人が屏風談義をはじめたので絵解きを頼んだところ、渡り鳥の雁が大陸から日本への長旅に柴の枝を咥えて飛来。海上での休息時にはその柴を浮かべてしばし羽根を休めたという言い伝えがある。日本列島に到着すると函館の海岸に柴の枝を落とし、好き好きに飛んで行く。春になり、大陸に還るときには同じ柴の枝を拾ってゆくのだが、毎年、拾われずにうち捨てられたままになる枝が多くある。それを見た人間が「ああ、今年もこれだけの雁が日本で命を落としたか」と哀れに思い、柴の枝を集めては風呂を焚き、旅人や修行者に入らせたという。互いに素性を明かすと、問うた武士は水戸黄門で、答えた町人は江戸の柳沢に三千両の取り立てにいく蟄居を命じられた淀屋辰五郎。黄門が、柳沢への文を持たせて別れ、辰五郎の「かりがねの講釈や」で落ちるという、上質な小説に聞き入るような人情噺の一席。

仲入り後は、上方落語を盛り立てるお囃子について、笑福亭竹林の司会で、早川久子・笑福亭松五・笑福亭飛海の三人が実際に三味線・笛・太鼓の実演を交えてレクチャー。桂染雀が南地・大和屋の芸者衆のお座敷踊り・浪速おどりを披露。金の鯱の逆立ち姿に、会場からは拍手喝采で盛り上がりました。

住吉神社の鳥居前で駕籠屋に声をかけられた上品なお年寄りが新地の綿富へ。大判振る舞い貸したお金を倍返しの上に小判撒きまで、若い衆が跡をつけると今橋通りの鴻池のご本宅(当日の会場)。聞けば鴻池のご一統の飯野旦那。今度はいくらでも御貸ししますと綺麗どころそろえて訪ねいくと、綿富を訪ねてきた旦那に、「今日はいくらでもお立てかえいたします」というと、「今日はちょっと莨の火を借りたい」で下げ、笑福亭松枝の円熟味ある「莨の火」に、暫し江戸時代の粋なお大尽遊びを楽しんだ豪商の夢物語を垣間見た気がしました。

落語終了後は、スタンプラリーで①スタート地点(鴻池本宅跡)　②十兵衛横町　③大阪阪俵物会所跡　④　適塾　⑤銅座跡　⑥淀屋屋敷跡　⑦淀屋小路　⑧ゴール会場淀屋橋 odona を参加者が巡り、一等新米１０キロをはじめ、鳥取倉吉の小物や熟塾のボールペン等が当たるなど日曜日の昼下がりを豪商の夢の跡を巡って楽しみました。

熟塾：秋山建人・井上章・岩佐幹夫・大森史子・鍛冶睦子・北原祥三・中島一・佐伯和美・下野譲・田中俊三・浜田真弓・原田彰子・森川千世子・前川洋一郎・松井佐知子・宮本雅彦・森田秀朗・米川俊信　(敬称略)　一般：６２名